

# 大英帝国の秘密

長島伸一『大英帝国』によせて

堀川 哲

## 一

いま友人たちと一緒にイギリスの民衆運動史の本を日本語に移しているところ。

E・P・トムソンという人の書いた『イギリス労働者階級の形成』（正確には「イングランド」と言うべきだが）という本がそれ。一、〇〇〇ページ近い力作で、いわゆる「テイク・オフ」の時期のイギリス社会を対象とし、それに抵抗する民衆運動を微細に描きだしている。

どのような社会でも——資本主義であったり、社会主義であれ——テイク・オフ期は陣痛の時期でもあり、社会全体に万力がかけられたかのように、あちらこちらで軋みが生まれる。この混乱の時代はまた大小の革命家たちが活躍する時期でもある。もちろん、運動には色々な人びとが様々な動機をもって参加してくるわけで、目立ちたがり屋、アル中、詐欺師、悪党たちもまじっている。トムソンのペンはこうしたカオス的な状況を克明に描く。

しかしまた、革命的な民衆運動は、イギリスでは、十九世紀も中頃になると、ほぼ終わりをつける。そのことは、たとえばマルクスが、一方では、イギリスの地で、資本主義の解剖学の作業を進めつつも、他方では、それと同時に、イギリス労働者階級の「ブルジョア化」を嘆いている様をみても分かる。

なぜ反体制的な民衆運動が終焉していくのか、というテーマは、たいそうに言えば、社会システムの再生産のメカニズムは何か、という問題になるが、まあ大体のところは誰にでも見当がつく。私たちの国の高度成長期のありさまを考えてみれば分かる。考えてみれば、革命家たちの憤慨はどうあれ、労働者が「ブルジョア化」する、あるいは「ブルジョア化」できる、ということは、当然にも労働者たちにとっては文句のつけようのない幸いな出来事なのである。「ブルジョア化」を可能とさせてくれる体制に反抗するわけがないのは当然である。

## 二

そのあたりの事情は、長島伸一の『大英帝国』（講談社現代新書）をみるとよくわかる。この本のサブタイトルには「最盛期イギリスの社会史」とある。ここでは、この国が「世界の工場」と呼ばれていた時代、ビクトリア朝中期のイギリス人の日常生活の構造が社会史的な表現をうける。

本書から適当に抜き書きしてみることにするが、当時のイギリス社会の階層の絵模様は次の通り。

まず第一に上流階級。これは爵位を持つ貴族とそれを持たない貴族（ジェントリーと呼ばれる）から成る。前者の所有地は一万エーカー以上（約四〇平方キロで、東京の練馬区や太田区と同じ位の広さ）。年収は一万ポンド以上。後者のジェントリーでも、最低一、〇〇〇エーカーの土地を所有し、年収は一、〇〇〇ポンド以上となる。

この上流階級は「実用的でないもの」、当

座の役には立たないもの、つまりレジャーや学芸のなかに人生の美を見出し、したがって、ブルジョアII中流階級の実用主義と拝金主義とを軽蔑している。その精神は今日のイギリスの大学にもみられるものであり、今やサッチャーが攻撃のメイン・ターゲットのひとつとしているものだ。たしかに、まあ、あれだけの財産があれば、あくせく暮らす必要もなからう。この階層の人口比は二〜三%というところ。

次に来るのが中流階級で、ブルジョアという分かったようではない言葉で呼ばれている人間たち、つまり、工場主や店主主や貿易商たち、そしてまた技師や経理士などの専門職の人間たちから成る。この階層にもピンからキリがあるが、年収は平均三〇〇ポンドというあたり。人口比は二〇%程度とのこと。

この階層が「世界の工場」の担い手であり、「資本主義の精神」を支えている人びとということになるが、それにしても、貴族に比べると、大変慎ましいものである。(一万ポンド対三〇〇ポンド!)この中流階級は、いまもむかしも、イギリスでも日本でも、マイホーム主義の支柱であり担い手である。人間というものは、少しばかり小金ができる、自然にマイホーム主義者になるものかしら、なかなか面白いところである。

第三には、ひとまとめに「下層」という言葉で一括されてしまう人間たち。労働者・民衆ということになるが、平均的な労働者の年収は五七〜七八ポンド程度といわれる。八〇ポンド以上を稼ぐ労働者がいわゆる「労働貴族」である。もちろん、五〇ポンドをはるかに下がる収入しか稼ぐことのできない底辺層がこの下に控えている。

### 三

ここに大きな格差があることは誰の目にもあきらかなことだが、しかし、だからといって「下のもの」は「上のもの」に反抗しようとするわけではない。「下のもの」は反抗しようと考えるまえに、まず「上のもの」に追いつこう、それがかなわぬ夢ならば、「上のもの」を真似ようとするものだ。ブルジョアはかねができたときそつて土地を購入しようとし、田園でのジェントリーの生活を夢みるし、労働者は中流の生活スタイルを取りいれ、それを真似ようとする。こうして、ブルジョア的なマイホーム主義はまた労働者たちのもともめるところとなり、ブルジョアの生活とマイホーム主義のバイブルでもあるスマイルズの『自助論』は、中流の人びとと労働者階級の上層部分によって熱狂的に歓迎される。

このように、「上」を真似ようという感覚があり、またそれが可能とされるような経

済のレベルが維持され再生産されている間は、体制はたいした不安もなく順調に再生産されていくものだ。そのような経済のレベルを実現したのがテイクオフを完了したイギリスであり、また日本の戦後社会であつてみれば、そこで反体制的な運動が消滅していったのは、理の当然ということになる。

どうもつまらないはなしになってきたようだが、長島氏のこの本、あるいは一般に社会史の作品の面白さは、こうした「理の当然」のありさまを人びとの「趣味的生活」に即して活写していくところにある。

生活のスタイルというものは、言い換えれば、趣味のスタイルということだ。より下のものがより上のものを真似るといふことは、より上の階層の趣味とレジャーのスタイルを真似るといふことである。上の階層だけが特権的にもつていた趣味とレジャー(旅行や観劇や狩猟など)が大衆化されると、上の階層の人間たちは、シモジモのものどもにとっては手がとどかないような趣味とレジャーに移行する。サイクリングが大衆化されてしまうと、上流階級の人間たちは自動車に移る。鉄道が普及し、馬車が稀少価値的存在になると、上流階級は逆に鉄道よりも(家用の)馬車を選ぶようになる。飛行機の大衆化が船旅のステイタスを引き上げると同じ現象であるが、

本書のなかでは、ある種の趣味とレジャーの大衆化 ↓ より高級な趣味とレジャーの登場 ↓ その大衆化、というどこの大衆社会にもみられるこうした消費の回路がイメージゆたかに描かれている。この回

路が動いている限り、当該の体制は安全地帯にある。我々の社会はもうすでにずっとまえから、この回路のなかを走りまわっている。そしていま、テイク・オフをどうにか達成したアジアの新興工業国家群がこう

した回路に入りつつあり、中国も急いでこの仲間に入ろうとあせっているという時代である。